

ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2024

新しい1年がスタートしました。今年はどうな年にした
いですか。3学期が始まり、学年末に向けて忙しくなります
が、たまには暖かい飲み物片手にゆっくり本を読んで、ほ
っと一息ついてみませんか。

1月むつき(睦月) はつはるづき初春月 さみどりづき早緑月)

二十四節気

しょうかん小寒 6日

寒さが極まるやや手前の頃です。「寒の入り」
といい、節分までの約1か月が「寒の内」です。

だいかん大寒 20日

一年で最も寒い時期です。酒や味噌など寒気
を利用した食物が仕込まれ、これを「寒仕込み」
といいます。

図書委員からお薦めの本

『これが人間か』 プリーモ・レーヴィ 著、竹山博英 訳 朝日選書

現在、ウクライナやガザ地区、世界各地で戦争がおこっている。そんな中、次の世代に戦争の恐ろしさ
と平和の大切さを伝えようと、活動されている作家が大勢いる。その一人、プリーモ・レーヴィの“これ
が人間か”を紹介する。

“これが人間か”はユダヤ人である彼がアウシュビッツ強制収容所へ送られ、生きて故郷へ帰るまでの記
録である。「ユダヤ人」という理由で600万人も亡くなったホロコーストを経験した当事者が語る言葉に
情報処理ができない。“囚人は一万人ほどいるが、一つの灰色の機械にすぎない”この描写に震撼させら
れた。ナチスは人間から人間らしさを完全に排除することが本当の目的だったのだろうか。彼はこの本
を通じて残酷な事実があったことを世界の人々に発信し、間違いを繰り返してはならないという彼の強
い意志を伝えたいのだと思う。ぜひ、読んでみてほしい。

(2年 女子)

薦めてみる本 夏目漱石『こころ』 各種文庫で読める。最も読まれている本。

[1] 作者 夏目漱石 (1867～1916)。作家。江戸に生まれる。帝国大学卒業、地方の学校教師、ロンドン
留学などを経て東京帝大の教師になるが辞し、朝日新聞に入社、文芸欄を担当。多くの作品を発表。代表作『吾
輩は猫である』『坊っちゃん』『三四郎』『それから』『こころ』『道草』『明暗』など。

[2] 『こころ』大正3年(1914年)朝日新聞連載。漱石は当時48才。上中下三部からなる。ネタバレしま
す。

上は「先生と私」で、若い「私」が明治45年頃のことを回想した手記。そのころ若い「私」(東京帝大の
学生)は「先生」という謎の人物と知り合い、惹かれる。「先生」は東京帝大出の山の手の知識人だが、仕事
をせず、美しい妻・静子と暮らしている。「先生」の談話は若い「私」には大学の講義よりも有益だ。「先生」
は何かしら人生を背負っていて、「私」の人生にとって有益な話をしてくれそうな気がする。かつ、当時の帝
大出エリートたち(同級生は出世している)を「先生」は激越に批判する。西洋化・近代化を表面的に推進す
るだけの体制知識人たちよりも、「先生」の方が学問・識見が遥かに高く深いのだ。

中は「両親と私」。「私」は田舎の父が病気なので帰省する。田舎がどこかは書いていない。実家は大きな農家ようだ。「兄」も帝大出で九州で活躍している。当時九州は韓国併合（1910）直後で、朝鮮半島への帝国の進出の窓口だ。東京の「先生」のことを「父」は、高学歴なのに仕事をしていないのはどういうものかと否定する。「兄」も同様に「イゴイスト」だと否定する。「私」はそれに納得できない。「父」は「私」の卒業証書を床の間に飾る。近所の作さんが「父」のことを「子ども二人大学にやっつて」とうらやむ。「父」も「兄」も作さんも、帝国主義システムの価値観の中であって、それを相対化できない。対して「先生」と「私」は帝国主義システムの価値観から自由だ。「母のお光」も、その意味では当時の「良妻賢母主義」の枠内の女性だ。（対して「先生」の妻の静子は、子どもがいないのだから、「良妻賢母」失格だ。漱石は恐らく意図的に対照させている。）「先生」から自死をほのめかす長文の手紙が来る。「私」は思わず東京行きの列車に飛び乗り、手紙を読む。

「下」は「先生の遺書」だ。そこには「先生」の生育歴と明治30年頃の学生時代のことが書いてあった。「先生」は新潟の出身だが、叔父に財産を奪われ、人間不信になった。東京で下宿のお嬢さん（静子）と出会うが、同宿の親友・K（親を欺いてまで宗教的真理の探究・実践に生きようとしたが、静子への恋に落ちた）を欺き静子を奪い、そのため（かどうか不明だが）Kが自死してしまう。「先生」は自分をも信じられなくなる。世間と関わらず「死んだ気で生きていこう」とする。明治末年を迎えた頃、若い「私」に出会う。「先生」は「自由と独立と己れに充ちた現代に生きる我々は、その代償として淋しみを味わわざるをえない」と同時代批評をする。明治天皇が崩御し、乃木希典夫妻が自殺したのを見て、「先生」はこの世から去ることを決意。但し乃木夫妻とは異なり、血を見せず、静子を残して。以上の内容を長い長い手紙に記して、若い「私」に送る。「先生」は最も大切な「こころ」を「私」に残した。

「上」を再読すると、若い「私」が手記を書いている語りの現在、「先生」はすでに亡く、静子は生きることが分かる。「先生」から大切なものを継承して「私」は新しい時代を生きようとしている。「先生」の叔父は金のために家族を裏切り、Kは自己の信念のために家族を裏切り、「先生」は恋情のために親友を裏切った。彼らは自己の欲望のために他者を犠牲にする、同じ明治近代の申し子だ。まことに明治人は「自由と独立と己れに充ちた」時代であって、孤独で淋しい存在なのだった。その「淋しみ」に帝国がつけ込む。そういう時代を終わらせ、新しい大正新時代においては、人と人とがこころとこころで繋がりあう関係を築いてほしい、と「先生」は「私」に伝えたのだろう。「私」は今でも「先生」を尊敬し、「よそよそしい頭文字文字」などでは呼ばず、冷徹に観察などしなかった。「先生」は「愛」（注1）の人だった、と「私」は改めて感じつつこの手記を書いている。（「先生」がKを頭文字で記し、冷徹に観察して攻撃したのとは違う関係を、すでに「私」は「先生」と結んでいた。）

漱石は、乃木夫妻殉死を賛美する世間（森鷗外を含む）の風潮に対し、この書で批判を加えている。鷗外は古き良き武士道を歴史小説で書き続けるが、漱石は新しい時代の新しいモラルを現代小説で探り続ける。漱石の弟子が和辻哲郎や安倍能成だ。和辻は和辻倫理学を作り、安倍は戦後文部大臣となり戦後の人格主義的な教育の土台を築き、日本に光明を灯した。（注1：「愛」は漱石文学のキーワード。『虞美人草』『それから』等を見よ。）

（参考になる本）石原千秋『漱石はどう読まれてきたか』、小森陽一『「こころ」を生成する心臓（ハート）』、小森陽一『世紀末の予言者夏目漱石』など